

・雨でも休まず、256回、257回・

「小原本陣の森・若柳嵐山の森」

- ・定例活動：3月 1日（第一日曜日）：協力協約：中里山整備。参加費400円。  
担い手育成、技術向上を兼ねる。
- ・定例活動：3月15日（第三日曜日）：若柳嵐山の森・里山交流、多様な森林活動。  
参加費400円  
\*楽しく優雅な雰囲気、恒例の「梅林の中：“お茶会”」開催。  
.....
- \*注意事項1：初参加者は、9時15分までにJR相模湖駅前集合、ベテランは各自森へ。  
・服 装：汚れても良い服装、着替え・滑らない足元。  
・持 参：飲料水、成るべく皮製手袋、万一の怪我に備えて保険証、自分の食器
- \*注意事項2：危険管理・救急体制：森林ボランティア保険他、会として可能な限りの体制を敷いていますが「怪我・事故は、自己責任」です。

・木を使うことは、森を守ること：“緑のダムの森林の保全・再生活動”

“使う”ということは、木材など森林資源をお金に換えられるように商品化して（経済性創造）その利益を森林に還し、“森を守る：森林の保全・再生（環境性保持）”に資すると言う事だ。

- ・・・なかなか成果が上がらなくて苦慮しているが、どのようにそれを具現化しようとしているか・・・。
- ・藪に包み込まれてその森がどういう森か分からない。藪を伐り開いていく内に、そこが100年を超す大径木の森だということが分かった。藪開き後、欠頂木や痩せ木を間伐してその中から使えそうな木を約25立米（家一棟分）選び出して製材して売り出してみたら手元に約60万円が残った。原木代を地主さんに支払った残りでノコ、ナタ、鎌を買って森林整備活動に使わせてもらっている（2006年）
- ・兼松会員が杉の太めの枝を使ってサンタを作った。バカ売れに売れた（2006年）
- ・「間伐材をいかす：森づくり・モノづくり・コンテスト」を企画し、全国から161点の応募があった。第二回目の08年には266点が集まった。商品化して利益は、森林の保全再生に使う（2007年）
- ・FSCの森で伐出した木を使って積木を約5万個作った。森林NPOがFSC材で作る積木は、小川富一さん（箱根寄せ木細工の名工）に作って貰っている。その技術はご子息に引き継いで貰う。仕上げ加工は、相模湖町の福祉作業所“やまのべ館”にお願いしている。5万個の内、2万個が売れ、3万個の予約が入っている。（約90万円の粗利を見込んでいる・・・2008年）
- ・向後3年の目標を“環境・生産林：林地団地化・集約施業の試み”に置いている。小規模地主さんの協力を得て（団地化）経済性を産み出す合理的な森林施業のシステム作り（環境に配慮した生産林：集約施業）をし、地主さんにお金を戻す。そして地主さんたちにも、森林整備に参加して貰おうと言う試みである。国内認証SGEC（緑の循環システム）も視野にある。

\* 森林に経済性を持たせる仕組みづくりは現状、簡単ではないが自由で柔軟な発想を得意とする、NPOこそやらねばならないと考えている。

2月1日(日)に小原での活動が行われました。今回は小原の中里山の間伐を行うために、選木を行いました。このエリアの間伐は目標300本切るということになり、約10人で一人につき30本のテープを持って挑みました。細い木や斜めになっている木を中心にテープで印をつけていきました。急斜面での作業だったので結構上るのが大変でしたが、最終的には木を見ることにも慣れてよかったです。印をつけたい木のところになかなか行けなかったりと色々摸索したこともありましたが、木の根が張っているところは安定していたので木々のありがたさが違うところでまた感じられました。



また、Forest Nova の一部のメンバーは間伐を行って倒した木を経路に利用しました。

今回の作業は午前で終了し、午後には小原の集会場で小原塾活性化のために鳥取の鹿野町からいらした小林さんによる街づくりについての勉強会が開催されました。祭りの重要性、地域の人たちでイベントを行うことでの交流など、色々なお話が聞けておもしろかったです。

.....

学生たちがグングン力を付けており、卒業生の中から林業専門学校に入る者も出ている。担い手育成という目標も形になり始めている(石村記)

**\* 小原宿活性化推進協議会：歴史のある町並保全・勉強会（2月1日：第一日曜日）**

「小原本陣の森：整備」を午後1時で切り上げて、2時からの小原町集会場での勉強会に参加した。講師には、町の活性化で高く評価を受けている島根県・鹿野町の活性化に尽力をした「NPO法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会（大臣賞受賞）」の小林副理事長が遙々、来て下さった。



・キーワードは、歴史・文化の継承発展と共感。参加者・お世話係が楽しいこと。

何よりも小林さんが楽しそうに嬉しそうに、そして何よりも、少しも気取らない謙虚なお人柄が鹿野町の活性化に大きな影響を及ぼしたのだと痛感した。講演は、パワーポイントをフルに使っての講演で2時間強、飽きさせない話術と熱意に質疑応答も活発に、予定を1時間超過して終了した。参加者は集会場を一杯にする90人程で、地域の皆さんの“小原町が元気になるための熱意”がヒシヒシと感じられた。

**若柳嵐山の森・定例活動：3月15日（第三日曜日）**



春一番の吹いた翌日・暖かい日、森の入口の白梅も早々に咲き乱れる梅園。参加49名。

作業前の朝礼で「今日は、特別の参加があります」。林業政策に造詣の深い梶山恵司さんとご一家、女性建築協会の西村幸子さん、野鳥に詳しい佐藤洋子さんの紹介があった。

木工房では、望星高校の渡部君がグラインダーで削るもうもうと木粉の舞い

上がる中で卒業記念に間伐材テーブルづくり。

武藤・天野・西村君も看板づくりに精を出す。

・“望星の森”では、20名ばかりの高校生が宮村先生他、先生方の指導で間伐実習。

・NOVA 神宮学生は、初参加・東工大学生を案内して森見学と間伐体験。学生の自立した活動は頼もしい。大きなカゴを背負った齋藤学生に中身を聞くと、嵐山頂上でのお昼の豚汁だそう。そして、佐々木ファープルの豊かな森の生き物知識が活動を補足して、森を身近なものにしてくれる。

基地での昼食後は、梶山さんの世界を股にかけての豊富な体験・知識の話は素晴らしい。このような人の参加は、緑のダム活動に深みと厚みが出てくる。午後、齋藤体験学校長の間伐講習会にご家族全員で参加された。



お昼過ぎ、淵野辺町から 20km 以上もの坂道を自転車であつた齋藤学生が焼き芋を焼いてくれて終礼前の“暖か~い、ひと時”を演出してくれた（伊藤）。

.....

我が国の林業に大きな影響力を持つ梶山恵司氏が、当会活動に興味を持たれて参加された。先ず、集約化施業に取組み計画中の「小原本陣の森」を見せて欲しいとの事で、案内したが、ズンズンと先に立って歩かれる。森林がどうのこうのと言う評論家が多い中で、自ら先頭に立って現場を回る背中に本物の姿を見た（石村）。

## 緑のダム北鎌倉便り

報告 兼松まゆみ

北鎌倉からお便りします。名刹・東慶寺の竹で作る竹炭は、皆さんの手で窯の長さに整形し仕上げた関係で素晴らしい出来、1月24日に50kgが仕上がりました。その日の午後、会員3名で切って袋詰めし160パックを出荷しました。

現在、東慶寺は、各種の梅が香りを放ち多くの観光客を魅了しています。3月中旬には、今の受付販売を宝物館に移し場所を広げます。「里山は、炭で生き返る」をコンセプトの様々な炭素材製品の紹介販売の計画です。

境内の屋根の手入れは、びっしり生えている手ごわいアズマネザサの除去と雑木で出た材で、

尾根の水路迂回工事を主にやっています。神奈川インストラクター会の坂斉さんの指揮の下、今年から毎月1回の活動にしました。

\* 兼松さんは、「環境と経済が矛盾しない仕組みづくり」を実に上手に形にしており、活動の当初から活動費は、自前でひねり出している。このところ、東慶寺の竹藪整備で出た竹を炭にして“東慶寺竹炭”とブランド化して観光客の手頃な土産品として人気を呼んでいる。そして何と、売上の10%をプールして、「北相模が活動費捻出に困った時は、使ってください」との申し出をしてきた。(石村記)

## 緑のダム・湘南の森

報告 佐藤 憲隆

1月16日(金) 晴れ 9 : 30 16 : 00

今年から定例の第四土曜日の他に平日の第二金曜日も作業を行うことになった。集まったのは、岩澤代表のほか、小生も含めて男性3名。まず、今年の作業方針を話し合った。かねてから気になっていた、下刈り廃棄物がそのまま放置されている現状を改善したいという提案に、皆が賛成してくれて、廃棄物を作業地域北端部の地形が急峻になるところにまとめてダンプすることに決定、その部分を下刈りして整形した上でダンプを開始した。よくぞこれだけ刈ったと思わせる多量の廃棄物を斜面を上り下りしながら人力で運び込んだ。これはかなり辛い肉体労働だったがまだまだ廃棄物は残っている。捨て間伐という言葉があるが、これはまさに捨て下刈りだ!! 終了後、駐



車場近くのともしびショップでお茶をしながらの反省会、収穫はともしびショップの物置に道具類を置かせてもらうことになったこと、これまで岩澤さんの車で都度運び上げてきた不便さが解消される。



1月24日(土) うす曇  
9 : 30 16 : 00

今年最初の全体作業日、今回は女性4名、男性6名の計10名、うち10代を含む学生が2名と大幅に

平均年齢が若返ったようだ。16日の作業結果を報告し、男性は引き続き廃棄物の処理を行い、女性陣は昨年カタクリが芽生えた地域の整備を行った。斜面上部の廃棄物を一気にダンプ地域まで運ぶのはきついで、中間地帯に一時ダンプをすることにし、今回はこの作業の途中で仕事を終えた。単調かつきつい、いわば3K的な仕事ではあるが、きれいになった林床から春にはさまざまな草花が芽生えることを想像するとワクワクする。これぞ森の仕事の醍醐味かもしれない。(佐藤記)

## \* かながわボランティア基金 21 : 申請書提出 (2月4日・水) 報告 石村黄仁

神奈川県と協働する活動は、「森林と都市生活者を繋ぐ水源環境の保全再生」をテーマに 05 年度から 5 年契約で取り組んできた。21 年度は、その最終年 5 年目に入る。

4 日、横浜西口の「かながわ県民サポートセンター11F・小会議室」に県の各担当部署から 4 人( 県央森林課、企画部土地水資源対策課、環境農政部森林課、サポートセンター基金事業課 ) 当会から 3 人( 川田、吉田、石村 ) が参加した。打ち合わせは、9 時 30 分 ~ 17 時まで、文面の一言一句の内容を吟味・検討して友好的雰囲気の中、熱意あふれる討議であった。

特に印象に残ったのは、県担当者の皆さんが“ どうしても、緑のダムに協働事業の最終年を有終の美で送り出したい、事業終了後も県と良い関係で継続させたい ”との想いであった。一般に、「行政の下請け化する NPO 活動」と言われているが、この日のように常に協働相手の立場を思いやりつつ、事業内容には妥協を許さない真剣な話し合いは、そのような一般的評価の立ち入るスキはない。

基金 21 終了後のことだがこれまで 4 年間、県からは年間 500 万円もの支援を受けてきた。来年から、この 500 万円が一挙に無くなるということだ。森林 NPO に取って、マルマル 500 万円は大金である。この対策には、支援を受けた当初から支援後に思いをはせて、その対策として森林資源( 主に木材 ) の資金化に注力してきたが未だ、思うに任せない。そんな状況の中で、相模原市との協働が今年 1 月、年間 150 万円として決まった。

そこで、県からのご支援を 150 万円減額して 350 万円にしようということになったが、当会に取って“ 然るべくして成った減額 ”との県のご理解がありがたい。県ともども、森仲間が真剣に真面目に取り組んできてくれた結果、皆んなが納得できる神奈川県との協働事業だと思う。若し、県のご支援が無かったら、FSC も国土緑推会長賞もなかったろうし、月尾先生や桜井先生のご指導「NPO は世論を動かしてこそ」も実現できなかった。残す 1 年、悔いを残さない協働事業にしようと思いを新たにして、申請書に捺印して提出した。

## \* 水源環境の保全再生、県民フォーラム : 2月11日(水・祭)

~ 水源地・森林再生の第 2 ステージに向けて、全国の経験から学び、全国に発信する ~

JR 横浜線・橋本駅前、杜のホールに 329 名の環境問題に熱心な県民を集めて開催された。相模川流域をつなぐ上流から山梨県( 横内県知事 ) 中流から相模原市( 加山市長 ) 下流都市部・神奈川県から( 松沢県知事 ) が参加された。午前の部で各首長は、上流森林部・中流中間地・下流都市部、夫々の地域特性に対応しつつ、連動した広域的な森林保全・再生の取り組みが必要であると合意し共通の問題意識を持って取り組むことを提示された。このフォーラムで流域を一つに繋ぐ形に示された意味は深い。

午後の3分科会の採択した内容は、凡そ以下の通りであった。

・第一分科会（県民参加の施策展開）神奈川県が県民と痛みを分かち合う（県民参加）の時限立法・目的税である“水源環境税”の持つ意義の再確認、及び、あるべき協働の姿。

・第二分科会（NPOの役割）：県民・市民団体（NPO等）と協働する水源環境の保全・再生システム構築の必要性。

・第三分科会（求められる施策は何か）：科学的な知見に裏付けられた相模川流域を繋ぐ広域的な施策展開。



先進事例、高知県の取り組みでは「生産林」を目指す森林整備が10倍になったという報告に心強いものを感じた。そしてこの時期、上流・下流の中間地、水源の森林と都市をつなぐ相模原市で開かれたこのフォーラムの持つ意味は大きい。これを開催に持ち込んだ担当者の方々の熱意に深く敬意を表する。

### \* 相模原市衆境基本計画：相模原環境審議会

来年22年度の政令都市に向けて相模原市は、環境基本計画策定作業の大詰めに入っている。施策体系は、以下の6つの基本目標を示している。

- 1 脱温暖化を目指したまちづくり
- 2 資源が循環するまちづくり
- 3 豊かな自然を守り育てるまちづくり
- 4 健康で安全にくらすまちづくり
- 5 快適で心の豊かさを感じることができるまちづくり
- 6 多様な主体の協働によるまちづくり

\* 審議会には委員として参加させて頂いているが、行政の実に綿密な作業には驚かされる。

今回 Forest Nova の記事を担当します、神宮です。  
2月15日の嵐山定例活動の日、Forest Nova は他大学の学生を呼び、嵐山を散策しました。普段森へ入らない学生も多く、猪・アナグマの掘った穴や巨大なモミの木、急な斜面、頂上から見える相模湖など、いつもの生活とは離れた景色がとても新鮮だったようです。また、B 地点でチェーンソーを使って伐倒しているところを見てもらい、実際にチルホールも扱っていただきました。参加者の間でこの伐倒が一番印象深かったようで、私も小原で初めて伐倒の作業を見た時、木が倒れていく音をしばらく忘れられなかったことを思い出しました。

参加者からは、いろいろなものを見て、いろいろなことを聞いて、森にもっと興味がわいたとの声もあがりました。短い時間でしたが、お互い学ぶことが多かったように思います。

当日サポートしてくださった佐々木様、焼き芋を手伝ってくださった石村様、ありがとうございました。



- .....
- 活動のモットー : 急がず、楽しく、無理せず、休まず、ポチポチと・・・  
そして、沢山の参加で森は良くなる。
- 名 称 : NPO 法人緑のダム北相模
- 事務局 : 154 - 0023 東京都世田谷区若林 3 - 35 - 9
- 発行人 : 緑のダム北相模・運営委員会 T&F 03 - 3411 - 1636
- H P : <http://midorinodam.jp> E-mail : [info@midorinodam.jp](mailto:info@midorinodam.jp)
- 協働団体 : 神奈川県(企画部土地水資源対策課、環境農政部森林課、県央地域県政総合センター森林保全課) セブンイレブンみどりの基金
- ご支援の団体 : WWF・JAPAN, イオン財団、市民社会チャレンジ基金、東急コミュニティ J F E メカニカル, 神奈川県建具協同組合、生命の森宣言・東京